

令和5年度 小学校教育実習報告

小学校教育実習担当 初等教育科 大田亜紀・古川元視・秦潤一郎

令和5年度の小学校教育実習は、別府市内の小学校において1年生観察実習として5日間、2年生本実習として3週間実施した。別府市内の小学校の内諾業務については、別府市教育委員会への承認及び各小学校の承認を得ている。

本実習指導に関しては、現場での実習を念頭に置き、実習担当者から、現場での具体的な指導場面を中心とした指導を行った。

1. 学生数 初等教育科1年 55名
初等教育科2年 40名

2. 実習先

- (1) 観察実習 別府市内小学校 15校
(境川小、南立石小、亀川小、朝日小、石垣小、東山小、上人小、鶴見小、春木川小、緑丘小、大平山小、南小、別府中央小、山の手小、明星小)
- (2) 教育実習 別府市内小学校 15校
(境川小、南立石小、亀川小、朝日小、石垣小、東山小、上人小、鶴見小、春木川小、緑丘小、大平山小、南小、別府中央小、山の手小、明星小)

3. 実習期間

- (1) 観察実習 令和5年 9月4日～8日(5日間)
(2) 教育実習 令和5年 10月5日～25日(3週間)

4. 教育実習の意義・目的

これまで大学で学んできたことを、小学校の教育現場で経験豊かな教員の指導のもとに、児童と直に接する具体的な活動を通して理解するとともに、実践的な指導力の基礎を身に付けるものである。同時に、児童や教職員との触れ合いの中で、教育の営みを具体的に学び、そこで得た課題を大学で研究することにより、教育者としての識見や教育観を養うことを意義および目的としている。

5. 教育実習校の様子

小学校実習担当者が各実習校を訪問し(教育実習のみ、観察実習はなし)、学校長に実習生の様子を聞き、さらに実習生本人からも取り組みや実習の現状について聞き取りをした。また、訪問時には時間の許す限りにおいて、実習生の研究授業、査定授業を参観するようにした。

6. 教育実習を担当して

今年度も新型コロナウイルス等の感染症対策については、前年度同様に自己管理を意識させ、実習に臨むように指導を行った。短い期間ではあるが、学生にとっては、実習を通して得た学びは大変大きく、学内だけでは十分に理解できない現場体験の貴重さが実習後の振り返りに表れていた。実習での経験をもとに、未来の自分を思い描き、今後の進路についても深く考えることができていた。

「児童がつくっていく教室」

初等教育科1年 朝田 花香

これから「児童がつくっていく教室」について述べる。ただし、観察実習では小学6年生を担当したため、これから出てくる「児童」は、小学6年生のことをさす。

まず、観察実習を通して得た5つの事実をあげる。1つ目はより係活動を良いものにするための話し合いを行っていたことだ。2つ目は授業時のICT活用を児童が主体的に行っていたことだ。3つ目はグループワーク活動時の児童の気づきである。

1つ目については、主に学級活動の授業での気づきである。授業時に係活動内容の見直し、よりクラスのためになる活動方法を見つけ出す時間であった。私は主に音楽係に着目した。音楽係の内容としては、朝の歌の時間に音楽を流す係である。児童での話し合いの中では、「みんなの声が小さいから、ただ音楽を流さずに、音楽を流す際に毎日目標を言っていこう。」という意見がでた。この意見を聞いた際、児童で声掛けをすることにより、背中を押される児童が多くなり、歌う人が多くなるのではないかと考える。よって、係活動内容の話し合いはクラスの雰囲気良くなることに繋がる時間なのではないかと考察する。実際、次の日朝の歌の時間、前日より大きな声で歌うことができていた。その歌声を朝から聞いて児童一人の気づきから、クラスメイトみんなが心を動かされることがあると強く感じることもできた。

2つ目については、理科の時間での気づきである。月の影は地球から見てどのように見えるのかを考える時間であった。その際、担当の先生が「タブレットを使用してみよう」と児童に声をかけた。そうすると、1人の児童が太陽になり、月の周りを回り出した。その周りに児童

が集まりタブレットで写真を撮り始めた。撮った写真を皆で見る時間の時には、児童が「AirDropでみんなが見られるようにしましょう。」と児童がICTを用いて提案する場面を見ることができた。この活動見た時、ネット社会になってきている現在、ICTを小学校から活用することで思考力を育成し、主体的かつ他者と協同して問題点に取り組む力を養うことに繋がると考えた。私が小学生の時よりもとても分かりやすく勉強することができていると思った。また、ICTを利用しているときの児童はとても生き生きとしており、勉強している姿がとても楽しそうにみえた。

3つ目については、国語の時間での気づきである。2人グループをつくる際、1グループ休みの児童がいて2人組を作れないグループがあった。そのグループを見た児童が、「〇〇の隣の子もいま居ないから一緒に2人組になったら。」と提案していた。この児童の気づきを見た時、周りを見える児童がいることで、誰もが過ごしやすいクラスになるのではないかと考える。

実習に行く前までは、正直児童は先生に言われてから行動するものだと思っていた。でも実際は、児童が課題点検を行ったり、児童が給食の前に「このおかず食べられそうに無かったら、最初っから減らすね。」など声掛けをしたりしながら給食を一つも残さない工夫も見られた。私が小学校の時は、先生から言われてすることがほとんどだったし、インターネットを用いて授業などほとんどなかった。また、先生も問題が分からない児童に対してすぐに答えを教えるのではなく、児童が答えを導きだせるような教え方でとても児童のためになるやり方だと思った。

私は観察実習を通して大きなことに気づかされた。今までは問題が分からない子が一人でもいたら寄り添う教師を目指していたが、現状の

小学生は友達と教えあったりして問題を解決する。私が小学校の教員になった時には、一人ひとりが自分らしくありのままでいられる。また、お互いを認め合うことができる環境を作りたい。そういった環境を作るためにも、児童同士での話し合う時間はとても大切である。どんな意見でも児童が発した意見を大事にし、発表することへの不安等少しでも減らすことのできる温かいクラスをつくり上げたい。そのために、今私ができることは周りの人の意見に耳を傾け、大学での意見を交換する時間も大切にし、実りあるものにしたいと強く心に決めた。

「子供たちを取り巻く環境と その姿の関係について」

初等教育科1年 進 聖弥

私の5日間の実習先は東山小学校で、山奥にあり周りには自然豊かな環境が広がり少人数、複式学級で12年の連携教育を行う学校だった。多くの子供たちと触れ合い、そして先生方から多くのご指導を頂き、気づきや学びを得た。その中で私は、環境構成と子供たちの姿は深く関係していると考察した。3点の実例を挙げ、この考察について述べる。

まず1点目は、東山小では、幼稚園生から中学生のすべての子供が、互いに協力し合うことが日常となっていた。それは、決して先生から言われて行動するというのではなく上級生自ら動き、そして下級生も自ら上級生の下へ何かあるときには動いている光景が多々見られた。例えば、掃除の時は1～6年生が混ざった班で各エリアを掃除していた。そして、6年生の主導でみな班ごとに集まり掃除の振り返りやチェックをする体制になっていた。また、給食当番も同じように全学年で行う。運動会も幼稚

園生から中学生全員が参加し、中学生が指揮して幼稚園・小学生がついていき、先生方はそれを見守るだけだった。

2点目は、子供たちを取り巻く自然や人間関係からなる環境構成が豊かだった。東山小には山が近くにあり、植物や雪などの自然環境もたくさん見ることができるほか鹿や猪などの野生の動物も見ることがある。様々な自然の説明も子供たちから話してくれ、また動物の話もよくしてくれた。寒くなると鹿や猪が山から降りてくるなどの季節によってみられる動物の特徴や、その動物に対する危険度や対応方法など生活環境に深く自然が関わっていると感じた。また、人間関係の点においては運動会や文化祭などのイベントの際、保護者はもちろんだが地域住民が設営から競技の参加まで行う。子供たちも周りの大人とのコミュニケーションに抵抗を全く感じていなかった。子供たちにとっては、周りの大人とともに学校行事を行う文化や習慣が当たり前のようなようだった。

3点目に、教室の環境が他の学校と全く異なっていた。まず、1クラス計10人となっており5年が4人、6年が6人だった。そのため、わからない問題は先生がその場でわかるまで教えていたり、子供全員の意見を聞きだしたり共有することができていた。そして、子供の発言する回数も多く、丁寧な指導と積極的な子供の姿を見ることができた。また、複式学級の良さも発見することができた。例えば、A君という6年生の子は生まれつき体が悪く、今年から転入してきた。東山小では、運動会のメインが一輪車となっており全員がかなり高いレベルまで乗ることができ、技も子供自身が決めて演技する。しかし、彼はまだそこまで乗れず競技決めの時に、何人かが大技に挑戦したいから同じレベルの人たちとだけ演技をしたいと話した。一方で、他の子供は最後だから全員でやるべきだと主張し、話し合いは揉めた。話し合いでは5

年生も6年生に負けずしっかり意見をして、6年生はそれをちゃんと尊重し、全員が対等に話し合いを行っていた。最終的に全員でできる演技をすることに決まり、子供たちだけで解決することができた。そして、最終的に彼が上手く乗れるように最後まで練習に付き合ったのはB君という5年生の子だった。彼もまた他の学校で友達と喧嘩が絶えず、うまくなじめず2年生の頃に転入してきた子供だった。2人は教室でも常に一緒に、A君はB君がいるから学校が楽しいと言っていた。実際は先生がB君に一輪車を教えてあげてくれないか頼んだらしいが、先生自身も2人がここまで仲良くなるのは予想していなかったようだ。

さらにこれらのことから、東山小の子供たちに関係している環境は大きく3つあったと考察する。

1つ目は幼いころからの異年齢との関わる環境により、子供たちは「協力」「思いやり」を身に着けていくことができているといえる。この環境構成については東山小のHPの「学校の特色」にも記載されており、12年間の連携教育による子供たちの姿が見ることができたと言える。(①)

2つ目は、教室の環境だ。少人数教室により一人一人の状況に応じたきめ細かい指導が可能となり子供の積極性と個性を伸ばすことができていた。また、他の学校ではなじめなかった子供や持病がある子供、そして複式学級のおかげで子供たちは多様な人との関わりを得ることができている。それにより、考え方や人との付き合い方も多様なスキルを持つことができていると考える。

3つ目は、自然や地域社会などの学校外の環境だ。豊かな自然を体験することで子供の想像力や興味や探求心、またその経験を言語化するコミュニケーション能力なども身につけていたと考える。地域社会の大人たちが積極的に交流

することで、子供たちからも地域社会と関わりに抵抗を感じさせなかった。

以上のことからわかるように環境構成と子供の姿の関係は深く、言い換えると環境次第で子供の姿は変わると言える。東山小のような環境の学校はあまりないため、来年の実習では小学校だけでなく、幼児教育や中学生の様子なども観察して教壇に立った時に使える引き出しを増やせるようにしたいと思う。

「個々の把握と支援について」

初等教育科2年 佐保 紗來

私は今回の教育実習において、児童に対して個人の把握を行うことの重要性について、深く学ぶことができたと感じる。2年生に配属された中で、様々な場合においてその重要性は生かされていたが、特にそれを感じた場面が、実習を通していくつかある。

1つ目は、生活の場面だ。学校生活を送る中で守らなければいけない決まりというものがあり、児童はそれを練習している最中であった。しかし、その中でも、個人によってできることは異なり、全員が同じ目標で生活できているわけではないということが観察できた。例えば、掃除時間である。全体としての目標はあり、教員の指導により繰り返し練習されていることが分かったが、児童によってはその場所に行き取り組むことが目標であったり、係の仕事を忘れずに行うことが目標であったりしていたと感じた。

さらに個人の異なりを観察できたのが、2つ目の授業の場面についてだ。進度や、できることが大きく異なる児童が同じ授業に参加していた。それに対し、教員が、それぞれに特別な措置や声かけを行いながら、授業を進める様子が

あった。例えば、算数のノートを取り、練習問題を解くという場面である。指示がうまく理解できずにノートを開くことが遅れたり、前に例があるが手元のノートとなったら内容を反映しづらかったりする児童の姿があった。教員はそれに対して、机間指導や説明の工夫を丁寧に行っていた。

このような場面を通して、教員が児童それぞれについて把握していることで、できる支援の幅を増やし、適切な支援を行えるようにしているということが分かった。生活の場面や、授業の場面を観察していく中で、児童が個人によってできることが異なり、それぞれに練習している課題があると感じた。そして、その課題を明確にして成長を促すためには、教員が児童一人ひとりについて把握していることが前提であると感じた。その前提は学校生活を通してどのような場面でも適用されるものであり、必要性の高いものであるということが、教員が行う支援について観察する中で考えることができた。

このように個人の把握を行うことで、児童のさらなる成長について支援が行いやすくなるということが分かった。児童は、できないことばかり言われてそれについて努力することばかり強要されていると、だんだんと自分のできないことや頑張ろうとしていたことに対して、意欲がなくなってしまうと考える。自分ができないことについて頑張ろうとしているのにも関わらず、より上を目指すように言われたり、どのようにすればよいか分からないのに、ただ周りのみんなと同じように努力してみようと言われたりしても、それは教員からの強要であり、児童にとって適切な支援ではないと考えるからだ。

したがって、教員が児童一人ひとりについて把握し、その児童はどういったことが得意で、どういったことが課題なのかを考えることで、適切な練習のステップを提示することができ、教員の面からも児童自身の意識の面からも児童

の成長に繋がりがやすいと考える。

「クラスの多様性」

初等教育科2年 吉田 滉

私は、3週間の教育実習を終えてクラスの多様性についていくつかの視点で考えた。1つ目は、学級内に他国籍の児童が在籍していたり両親の一方が外国籍の児童が在籍していたりすることが当たり前になっているという現在への視点だ。私が実習を行った明星小学校の6年1組では、4人に1人の割合でそのような児童が在籍をしていた。学級内では、そのような児童たちに対して誰一人として仲間外れを行うことをせずに、日々仲良く過ごすことができていた。しかし、ふとした瞬間に特定の児童に対して人格を否定したり小馬鹿にするような発言をしたりしてしまう児童の姿も見られた。その際には、担任の先生がその場で注意をすることで駄目なことであるとその都度伝えていた。

2つ目は、児童間の差についての視点だ。児童間の差は、学力面や運動面で多く表れること学んだ。まず、学力面についてである。6年生になると中学受験を控える児童は、塾に通い学校で習う範囲をすでに学習していることが多く見られた。すでに学習しているということは、先生が教えたり解説したりする前に問題を解き終える。しかし、学級の中には塾に通っていない児童も在籍している。そのような児童は、先生の説明を聞いても難しそうな反応をする。この学力の差が特に表れた教科は算数である。具体的な例として、場合の数を求める際に、塾に通っている児童は中学校や高校で習う解き方を使って解けていたが、塾に通っていない児童は解き方を理解することから始まった。このように、学習進度や理解度で差が生まれてくること

を感じた。次に、運動面における差についてだ。小学校高学年になると、男女の体格の差や運動能力の差が大きく見られた。何をするにしても男子の力が強いので、男子対女子を行っても結果が歴然としていたが、運動面においても児童たちは誰一人仲間外れにすることなく活動することができていた。

以上のことから私が考察した内容は、教育者として学級内や学校内で見られる多様性を積極的に受け入れていくということだ。何故かという、児童の間で見られる多様性について教育者が受け入れていなければ、他の児童は受け入れようとしなからぬ。児童は、良くも悪くも担任の先生や周りの先生のことを観察している。その為、先生の言動から学ぶことも多くある。そのような時に、児童の多様性について先生がいい加減な対応をしていけば他の児童も受け入れられずにいい加減になると考える。従って、教育者の立場に立とうとする私たちが多様性について考えていかなければならない。

これからの学校現場は、児童の数が減っていくが学級内や学校内での多様性は増加していくと予想している。児童が多様性を認められる雰囲気をつくれるように心がけたいと考えるようになった。また、児童間における差を少しでも解消できるように指導方法を児童に合わせていきたい。その為、周りの先生方との情報共有やアドバイスをしてもらえるよう行動すること、沢山の研修会に積極的に参加し、その時の時代や児童に合った指導ができるようになりたいと考えている。これが私の実習での学んだことの1つである。